The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国の大学の中国人日本語専攻教員が持つ卒業論文指導に関わる文章教育観 : 重点大学の教員9 名へのインタビュー調査から
Author(s)	村岡, 貴子; 阿部, 新; 中島, 祥子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2023, 27, p. 103-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第27号（2023）

中国の大学の中国人日本語専攻教員が持つ卒業論文指導に関わる文章教育観

―重点大学の教員９名へのインタビュー調査から―

村岡　貴子*・阿部　新†・中島　祥子‡

要　旨

本稿の目的は、中国の重点大学で日本語専攻を担当する日本語非母語話者である中国人教員9名が有する、卒業論文指導に関わる文章教育観を明らかにすることである。具体的には、半構造化インタビューにより、優れたレポート・論文に関する文章観や、4年間の学部における卒業論文に至るまでのライティング指導に関する文章教育観について知見を得た。その結果、専門分野の違いを問わず、どの教員も、卒業論文に対して、論理性、テーマ設定、問題意識や独創性等を重視し、4年間のライティング指導を含む教育実践で種々工夫がなされていることがわかった。同時に、4年間における学年の進行に応じた連続性のあるライティング指導の難しさの課題を指摘する回答もあった。また、大学によっては、学部2年次から参加可能な研究プロジェクトでの研究活動の経験や、大学院生のゼミへの出席が、論文執筆のルール習得や論文スキーマ形成に有用であるとの回答もあり、文章教育観が複数年度にわたって連続する有効な教育に支えられていることがわかった。

【キーワード】日本語専攻、中国人教員、卒業論文、文章教育観

1　はじめに

中国の大学の日本語専攻では、大学入学時に日本語学習を開始して、3年次には日本語能力試験のN1に合格する者が多い（国際交流基金 2020年度日本語教育 国・地域別情報）。このような漢字圏の強みが生かされ、非漢字圏の大学とは大きく異なる状況において、学部4年次には、外国語である日本語によって卒業論文を執筆することが一般に求められる（葛 2015，楊 2018，楊 2019他）。

そのため、日本語専攻の学生は、その目標に向け、学術的な研究の方法や意義を理解し、論文スキーマ（「論文・研究とは何かの概念の総体」（村岡 2014））の形成を、日本語を用いて徐々に行っていく必要がある。つまり、研究倫理が重視されるアカデミック・ライティングの高度な能力が必要な卒業論文を、4年次における研究の集大成として位置付ける場合、教員は、3年次までのライティングの指導内容と方法、および卒業論文執筆の各段階での指導内容と方法を有機的に連続させる[1)]ことが求められる（村岡・中島 2021）と言える。

このような学生の卒業論文執筆に向けて、テーマ選択から論文提出に至るまでの種々の段階における指導を行うこととなる日本語専攻の教員のうち、学生と同じ母語話者である中国人教員は、きわめて高度な日本語能力を獲得し、日本や中国の大学院で学位取得する等の学術的な経験を有し、研究の成果発信を日本語によっても行っている。こうした、卒業

*　大阪大学国際教育交流センター教授
†　東京外国語大学大学院国際日本学研究院准教授
‡　鹿児島大学学術研究院法文教育学域法文学系准教授

論文を執筆する学生のモデルとも言える研究者である中国人教員が、卒業論文指導の際に発揮する教育的な影響力・教育効果は大きいと考えられる。

村岡・中島（2022）では、そのような中国人教員で日本語教育学を専門とする３名に対するパイロット調査によって、日本語専攻における読解・ライティング教育に関する種々の取り組みや課題について明らかにした。そこでは「学生が主体的に論理的思考を深め、行動できるよう、また引用等の学術的なルール遵守を重視して教育課程修了までに、修了にふさわしい成果を上げることを強く求め続けている」（村岡・中島 2022, p.93）ことがわかった。

一方、上記のような日本語専攻では、日本語教育学以外の分野を専門とする教員も日本語教育に従事し、卒業論文の指導を担当しつつ日本語専攻の教育を支えている。このような専門分野の詳細の違いを問わず、自らも日本語学習経験者であり、かつ日本語を用いて研究活動を行う現役の中国人教員は、卒業論文指導に際して、どのような文章教育観を有し、指導にあたっているのか。それらを知ることは、卒業論文指導やそれ以前の関連のライティング教育に対して、有意義な情報を提供することが期待される。

本稿では、上記のような日本語専攻における日本語教育学・その他の専門分野の中国人教員が卒業論文指導を含むライティング教育に関与する状況を踏まえて、当該教員に対し半構造化インタビュー調査を行い、その文章教育観を明らかにすることを目的とする。なお、本稿での「文章教育観」は、本稿で報告・議論を行う大学の日本語専攻で作成が求められる文章に対して、このようにあるべきという文章観とともに、どのような教育方法が望ましいかの教員の見解を示すものとする。

2　先行研究の概観と本研究の位置付け

本稿での「文章教育観」については、多くの蓄積のあるビリーフ研究、特にライティング教育に関するものに支えられている。日本語の学習・教育に関するビリーフ研究は、国の内外を問わず多々行われてきた。その中で、ライティング、特に大学での諸活動に必要なアカデミック・ライティングに関して行われたものは、先述の村岡・中島（2021）のほか、韓国の教育文化的背景としての入試関連情報等も含め、関係教員へのインタビュー調査により事例分析した中島・村岡（2021）、学習者と教師のライティングに関するビリーフを量的に明らかにした阿部他（2022）以外には、あまり多くない。

なお、ライティング教育における文章観に関する数少ない研究として、近藤（2017; 2018）があり、それぞれ、日本人教師とウズベク人教師の作文に対する文章評価観、および、異文化間レトリックの観点から学習者の文章観を捉えた分析がなされている。本稿では、特にアカデミック・ライティングに焦点を当てた教員へのインタビューによる分析であり、上記の先行研究とは目的と手法が異なるものである。

現在、論文スキーマ形成に関わる研究は必ずしも多くはないが、教師や学習者が有する文章観や文章教育観を探ることは、教育・学習の場が日本か海外かを問わず、今後、教育実践や研究に資するものとして、研究の進展が期待される領域である。

3　調査の概要

3-1　調査協力者

本研究の調査協力者は、阿部他（2022）が中国各地の重点大学[2)]10校で行った質問紙調査（2020年11月から2021年１月）に回答した教員のうち、インタビュー調査に対しても協力が得られた、７大学の合計９名である。そのうち２名ずつ同じ大学に所属しているケースが２件あり、その他の５名は異なる大学に所属している。

調査協力者の専門分野は、次の表１の通りである。いずれの協力者も母語が中国語である。この９名は、卒業論文の指導を担当し、また、自身の専門分野に応じて学部の日本語専攻で「日本語」関連の授業を担当している。本稿では、９名の協力者の匿名性を

表１　調査協力者の専門分野

協力者	専門分野
A	日本語教育学
B	日本語教育学
C	日本語教育学
D	日本語教育学
E	日本語教育学
F	言語学・日本語学
G	言語学・日本語学
H	日本文学
I	日本史学

考慮し、大学名等のさらなる情報の提示を割愛する。

3-2　調査の概要

調査は、2021年12月初旬から2022年２月初旬にかけて、各調査協力者の都合に合わせた日時で、一人当たり、60～70分程度、Zoomを用いたオンライン形式での半構造化インタビューにより行った。

調査協力者には、事前に、書面により、調査の概要、および個人情報・プライバシーを保護する旨、説明を行った。後に、調査協力への承諾書を受け取り、インタビュー当日にも再び調査の概要を説明した。また、オンラインでのインタビューは、許可を得て録画した上で、調査後に、そのデータの文字起こしを行った。そのデータを表２の項目ごとにExcelファイルに入れて、該当部分を抽出して内容を分類した。協力者の説明が長文にわたる場合もあったため、著者らで内容の要約について確認作業を行った。

そのデータを分析する過程で確認作業が生じた際には、該当する協力者にＥメールで問い合わせて情報を得た。

調査項目は、卒業論文を指導する教員としての文章教育観を問うものであり、具体的には以下の表２の通りである。なお、表２の項目の質問に先立って卒業論文指導の担当の有無を尋ねてあり、本稿での調査協力者は全員その指導を担当していたため、表２の項目への記載を割愛する。

表２　調査の項目

番号	項目
1	卒業論文の指導体制：担当学生数、テーマ、事前演習等の有無
2	優秀な論文・レポートが有する特徴
3	初年次教育の有無
4	大学教育の一環としてのライティング教育で目指される指導のあり方
5	具体的な学習活動
6	課外における自律学習を促す支援

4　結果と考察

表２の項目の中で、紙面の都合上、いずれの協力者からも具体的な回答が得られた1、2、4に絞って報告する。3については、学科や学部で組織的に必須科目として行われている事例がほとんど見られなかったため、本稿での言及を割愛する。また、インタビューの後半において、質問項目の５、６で尋ねた項目に関する回答の中で、卒業論文の指導に直接関わる内容が言及された事例については、紙面の範囲内で、具体的に取り上げることとする。

以下、３点に分類して結果と考察を示す。

まず、4-1では、卒業論文の現状の指導体制について（表２の1）尋ねた結果を示す。

次に、4-2では、各協力者が考える優れた論文・レポートが兼ね備える特徴を具体的に語った内容（表２の2）を示す。それに伴う問題点や困難点等が指摘された場合には、具体的に事例を示すこととする。

続く4-3では、卒業論文の執筆を４年間の学習・研究活動の集大成と捉えて尋ねたもので、その完成に至るまでのライティング教育での指導のあり方（表２の4）について、それぞれの文章教育観や関連する問題点等を示す。

なお、協力者の特定を避けるために、以下、誰の発言かは示さない。

4-1　卒業論文の指導体制

協力者９名の日本語専攻における指導体制は、それぞれ若干異なっていた。

まず、教員一人が指導を担当する学生の数は、非常に少ない場合として１名もあり得るという回答が１件あった以外には、全体として２～５名程度で、多くて８名までであった。指導学生人数に関しては、入学者数が少ない場合に減少するという背景が影響するという事情を語った協力者も２名いた。

次に、卒業論文のテーマは、どの協力者の場合も、各教員の専門分野に可能な限り合わせるように（例：教員が文学なら学生も文学）専攻内で種々調整が行われていたが、９名のうち８名の教員からは、教員一人当たりの指導学生数の大幅な偏りを防ぐために、一人の教員が、専門分野と合致しないテーマでの指導を引き受ける場合（例：言語学系の教員が文化論的なテーマを引き受ける）もあるとの回答があった。また、教員一人当たりの指導学生数の調整が必要となる場合に備えて、分野の異なる２つのテーマを提出するよう学生に求めている大学もあった。

指導担当期間として、上記の８名とは異なる１名から、学部初年次より４年間、担任のような形で個別の学生の指導を引き受け、卒業論文の指導にまで至るといった回答も見られた。

4-2　優れた論文・レポートとは

協力者に対して、優れた論文・レポートの条件を尋ねたところ、9名全員が、内容の論理性、テーマ設定、問題意識、独創性を非常に重視していることが明らかとなった。それ以外に、資料・史料の質や、論証の方法・手続きを指摘する回答が5例（以下の回答2,4,7,8,9）あった。以下、それぞれについて具体的な9名の回答の一部を抜粋して順に示す。

なお、回答例に付した各種の下線と斜体字は、注目すべき箇所に筆者らが付したものである。4-2での各回答内の下線と斜体は、次のように回答内容を分類して示している。

論理性　：一重太線
問題意識　：二重線
テーマ設定　：点線
独創性　：波線
言葉遣い・表現：*斜体*
資料・史料の質、手続き：一重線

さらに、（　）は、インタビュー時のやり取りの中で筆者らが文脈情報を補足したものである。

回答1：

問題意識がはっきりしていて、研究課題が明確で、データがあって、そのデータに対する分析は納得できるもので、その分析も論理の通っているものといういくつかの要素があれば、いい論文かなと考えています。その筋が、分析の筋が通っていることが大前提です。

回答2：

論文の場合は、まず内容が、例えば問題意識が新しいものかどうか、そして、論理的、筋通っているかどうか、論文としてちゃんと理論的に通じるかどうか、それは一番大切じゃないかなと思います。その次は*言葉遣いです。論文の規範に準ずるかどうかは、やっぱり一番*です。それから言葉遣い。*多少の言葉遣い、間違った、不自然な言い方をしても内容的にいいもの*なら、*やっぱり優秀なものじゃないか*なと思います。

回答3：

できる論文はやっぱり発想が違うんですね。いわゆるイノベーションですかね。（中略）それは読めば、「あ、この観点が、この人の、この学生さんの考え方は非常に柔軟性がいいですね」とか、そういうようなことが評価されるんじゃないですかね。（中略）*正確な日本語よりは発想が優先される場合が多い*んじゃないですかね。*日本語はいくら正確に書いても自分らしさはない*ので、全部他の方の観点とか、そういう繰り返しはあんまり意味がないので、恐らく高い点数がもらえないと思いますね。

回答4：

そういうテーマについて、自分の考えがはっきりしているかどうかです。考え方がはっきりしていないと、*いくら上手な日本語で書かれても、結局何を言いたいかわからない*んです。もう一つ困ったことは、そういう引用というか、どれが自分の意見か、どれが人の意見か、それは明記しないこと。多分、いろんなネットから引っ張った資料もあります。一般的な言い方もあるし、ちょっとユニークな考え方もありますけれども、それを区別しないで、そのまま正しい考えとして論文の中に引用してしまいます。しかもそれは、自分の意見か他の人の意見かも分からないですね。それは、すごく困ります。

回答5：

論理性があるかどうか、問題意識が感じられるかどうか、*表現が分かりやすいかどうか。内容と表現両方のこと、両方の基準に満たしたもの*がいい論文だと思います。

回答6：

第一は論理的で、テーマは面白いか。（中略）ただ、テーマに合った内容であれば、1年生の場合は、習った文法がうまく使えて、ちょっとした内容があれば、それは評価しますけど、2年生になるとやっぱり内容と*表現*ですね。内容と表現が評価されるところです。3年生になると多分論理的で、特にレポートの場合は。

回答7：

完成度が高い。論旨がはっきりしてます。そして、その文は、やはり新しさがあります。そして、この論旨を論証する資料が確実です。そして、その論証の方法、手続きも、やはり整っている。

回答8：

研究型の人材を、人材育成という目標として掲げています。だから研究テーマのオリジナリティーとか、そして分析のデータの処理の仕方とか、ただパーセンテージをわるではなく、ほんとに自分なりに調査をやって分析して、オリジナリティーのものが出てきたり、そういうのが見ています。3点目はもちろん*言語の面*なので、うちの卒業生の論文は、日本語学科で日本語で書いてもらっています。それは*日本語のいわゆる質*です。*ほんとにアカデミックらしい書き方をしてるかどうか、そして言語の間違いがどれぐらいあるか*、そういうのが見ています。

回答9：

まず*表現が正しい*。そして論理的な論文は、それは基本的な条件だと思っています。さっき先生おっしゃったようにテーマ面白いとか、そして、新しい史料を利用して新しい事実を発見したりすることは評価したいと思います。私の専門、専攻は、日本の歴史です。だから、歴史の関連のレポートとか卒論は、最も強調したいのは、最も重視したいのは、やはり新しい史料。で、新しい歴史事実の発見と思います。

以上の回答に例示したように、論理性、問題意識、テーマ設定、独創性等への言及が多くなされていた。回答2、3のように、論理性や問題意識の重要度に言及する際に、それらが表現の正確さより優先順位が高いことを明示的に述べた回答もあった。同様に、テーマに関する書き手自身の考え方が明確であることが重要であり、回答3では、斜体字のように、「日本語はいくら正確に書いても自分らしさはない」との主張があり、正確な日本語で書かれていても新たな発想がなければ高い評価につながらないことを力説している。

次の回答4は、引用がなされた箇所の表現が不明とのことで論理性の問題としても太線で示し、かつ、言葉遣い・表現としても斜体で示してある。回答4は、回答3に続いて、「レポートと論文の違いがわかっていない」ケースで、論文に独創性がない場合は「すごく困る」と述べていた。学生自らの明確な主張が入らず、引用の際に自他の区別が明確ではない論文への対応に苦慮している様子がうかがえる。

続いて、回答5では、内容と表現の両方が重要であると述べている。この場合の表現のわかりやすさは、論理性にも深く関係することである。つまり、言語表現の正確さといった狭義の捉え方ではなく、内容と表現が表裏一体であることを示唆した回答であると解釈できる。

回答6では、論理性を重視することに言及しつつ、学部の在学段階に応じて着目点が変化することにも触れている。

回答7では、論文に関する資料や手続きについても言及をしており、それらの適切な処理を前提とし、論理性や問題意識の重要性を述べている。

次の回答8は、研究型大学の特徴という背景にも触れた上で、論文に示す分析方法にも言及し、かつ、日本語学科としての、アカデミックな日本語の質を重視する考え方が示されている。ここで、論理性といった表現は明示されていないものの、論理的に調査分析を行い表現することを包括的に捉えていると解釈することができる。

さらに、次の回答9では、一次史料の重要性を強く述べている。その前提として、「まず表現が正しい」といった、表現の正確さがあることの指摘がなされている。つまり、一次史料の存在と、その史料をもとにした史実の記述が過不足なく正確な日本語で示されることが重要と考えられていると解釈できる。

以上の通り、優れたレポート・論文に対する文章観については、協力者の専門分野が異なっても、基本的には論理性、問題意識、テーマ設定、独創性が最も重視されるものであることが明らかであった。これら4点は、協力者9名の回答においてほぼ共通し、各々の学生が主体的に思考した成果が論理的に表示された卒業論文であれば高く評価できると判断していることを示すものと言える。

また、日本語自体の正確な記述は、歴史記述等での重要性の指摘や、日本語専攻としての一定水準の存在を示唆する回答があり、重要ではある。ただし、正確さのみにオリジナリティーは見いだせないため、発想や内容を重視する回答が目立ったものと考えられる。さらに、人材育成の観点からの回答や、研究上の分析等の手続きを指摘する回答も見られた。

4-3　大学教育の一環としてのライティング教育で目指される指導のあり方

前述の通り、日本語専攻では、一般に卒業論文を日本語で執筆することが求められている。このため、

学部１年次の入門レベルから日本語学習を開始した学生は、いわゆる作文の学習から始まって４年次の卒業論文の執筆に至るまで、ライティング活動を行うこととなる。そこに焦点を当て、大学教育の一環としてのライティング教育で目指される指導のあり方について質問を行った。

ここでは、協力者９名が多様な視点から寄せた具体的な回答を、4-3-1から4-3-11までの11点に分類して示す。以下、4-3での一重下線は、4-2で付した下線の意味付けとは異なり、注目すべき箇所に筆者らが付したものである。なお、回答内の（　）は、筆者らが追記したものである。

4-3-1　多様な文章ジャンル

回答10は、具体的に教員が学生にとって学習が必要な文章ジャンルについて言及したものである。これは、在学段階によって、異なる文章ジャンルに慣れていく必要があることを示している。

回答10：

最終的に論理的な文章が書けるのが必要だと思います。そこまでは、やはり自分の気持ちを表すとか、メールとか、感謝状みたいなもの必要ですし、読んだものに関する感想文みたいなものも必要だと思いますし。あと、ある小さな意見文を書く、長い論理的な文章を書くまでに、そういう段階を踏んでいくと思います。

回答10では、卒業論文に至るまでに論理的な文章が書けるようになることが最終目標と考えられている。それ以前には、メールや意見文等、異なるジャンルの文章を作成する段階を踏んでいく過程についての指摘があった。外国語による論文執筆に至る前に、多様なジャンルの文章を作成することに慣れ、その上で、より手続きやルールが厳しい論文の執筆に挑戦する必要性を指摘していると解釈できる。

4-3-2　卒業論文完成までの時間管理

回答11の協力者は、学生たちによる卒業論文完成までの時間管理についても指導を行っているとのコメントを示した。

回答11：

例えば卒論の場合、卒論のスケジュールに沿って、テーマを出す日まで促します。文献を読んで書きたいテーマをゼミで発表しなさいみたいなタスクを。それで、学生は文献を読まないと発表できなくなります。ゼミのときは、自分もコメントしたり、他の先生もコメントをするので、その学生当人は、その本人は、ゼミの後、文献を読み直したり、研究計画書を書き直したりします。その作業の、一連の作業の中で、自分で、ゼミでやることはやはりすごく限られていますので、ゼミでのコミュニケーションのために授業、ゼミ以外でたくさんのことをやらなければなりません。

回答11では、締め切りを設けたタスクや、コメントを受けて文章を改訂する作業をしばしば課している。このように、こまめに多くの段階で課題を課すことにより、時間管理も含め、学生自身が責任を持って研究を遂行する学び手に育つことが期待されていると考えられる。

4-3-3　作文から卒業論文への接続

回答12では、初年次で書く作文と論文とでは、「ギャップ」が大きく違いがあり、それを「埋める」ことの困難さが示されている。

回答12：

１年生から、初心者からいろんな、「私の家族」とか何々についての考え、「私の読んだ本」「一番好きな人」などについて、いろいろな作文を出して書かせているんですが。やはり、これは論文とは大きな、違いますね。その中の、結構ギャップが大きいです。だからといって、それを埋める手段をそんなに施さない、出ていないんではないかと思います。だから、いつも最終的に、指導教官がその学生をまた一から指導して、個別指導となっていますね。

回答12では、学部初年次から自分の身近なテーマで書き始める日本語での作文と卒業論文との間で、大きなギャップがあり、それを埋めることが難しく、最終的には卒業論文の指導教官の指導によると指摘されている。ここでは、学生自身の中で、初級レベルで作成した作文と、４年次に作成する論文という各々の文章ジャンルの差異を十分に把握することの困難さが示されており、４年次になって、各教員が再び論文スキーマの形成を促す必要性があることに

言及していると言える。

次の回答13においても、作文と卒業論文との間にライティング授業がないこと、つまりカリキュラム上の問題への懸念が示されている。

回答13：

その方（作文から卒論に繋がるライティング教育）が断然理想的だと思います。私の大学のカリキュラムでは、2年生の後期に作文の授業があって、週に2回ですね。その後、3年生、4年生になったら、この卒業論文の書き方という授業があって、その間にはライティング教育はないわけですよ、現状では。なので、やはりずっと毎学期、少しずつ書く練習をしてもらわないと力が付かないというふうに考えているんですが。

上記回答13は、カリキュラム全体の弱点を指摘し、ライティング活動は、入門から卒業論文まで継続して行うことが重要であるとの考えが示されている。

4-3-4　外国語での思考の難しさ

回答14の協力者は、次のように、外国語である日本語で「ものを考える」難しさ、思考の深まりが母語ほどにはできない可能性を指摘している。

回答14：

論文を、ものを書くことは、ものを考えるものですね、と同じですね。日本語で書くとなると言葉の壁もありますけれども、確かに言語の制限は、そういう表現は、思うとおりに表現できないと、自分の考えをそのまま触らない、そういうこともあります。

回答14では、まず、論文を書くことは、論文の内容を思考することであると指摘している。このことは、深い思考によってのみ、論文が論文として成立すると言っても過言ではないことを示唆していると言えよう。また、そうであるからこそ、その思考を支える言語が外国語の場合、母語の場合のようには運用が難しいのではないかと指摘している。この回答は、学生と同じ母語を有する中国人教員として、外国語による思考の難しさを熟知する貴重なコメントであると言える。

4-3-5　読解・ライティングの各活動を結び付けた指導とテーマ設定

次の回答15では、精読から作文、さらにレポートに繋がるライティング教育を目指している。ただし、学術的なテーマの選択を希望する教員に対して、学生はアニメ等に関心が高いことや、論理的に書く困難さがあることについても指摘している。

回答15：

精読です。精読の授業の場合は週に1回、学生に、教科書に載ってる文章の関連のテーマについて作文、300字、400字ぐらいの作文を書かせます。例えば日本の公害問題とか。今、中国の最近の公害問題とか汚染とかについて資料を探して、自分なりの意見を入れて短い作文を書いてください、そういうことがあります。これを通して学生に学術研究というようなものに、レポートの書き方に慣れるように工夫しております。私、学生に発表してもらいたいテーマは、やはり学術的なテーマを。日本語を勉強したい理由はほとんど、アニメを見たいとかそういう理由です。でも学生は、やっぱり論理的に書いてくれる学生は、あまり多くないです。自由に、自分の思うままに書いてくれます。

回答15の協力者は、精読と合わせて作文という文章作成を課し、可能な限り学術的なテーマで書かせることで徐々にレポートの書き方に慣れるよう意識して教授していることがわかる。読解とライティングの両方の活動を、関連するテーマにより有機的に結びつけた学習活動は、論文指導の際にも重要な活動であると考えられ、そのことが学術的な文章の書き方の習得に繋がるとの回答であると言える。なお、実際に学生の日本語学習の動機が学術的なテーマに結びつくとは言えず、論理的に書くことの指導に対する苦労の一端も示されている。

4-3-6　引用の重要性

次の回答16は、「高級日本語」（筆者訳：上級日本語）を担当している教員の回答であり、特に引用についての言及があった。

回答16：

特に3年生から入ると、中国語で言うと高級日本語っていう授業があるんですね。私はちょうどその

授業を担当してるんですね。（中略）要するに昔、鑑真さんの中国から日本へ、そういうような行き来のことについての話とか、そのような文章は引用。論文じゃないんですね。引用がないんですけども、そのときは、私はなるべく中国と日本、友好関係の時代は、そのような内容をインターネットを通して検索して、そのような書かれた論文を皆さん、学生さんに配って、それで、「こういうようなことについて書いてるんですよ。どの部分からどの部分は引用で、後ろには参考文献のところに注をちゃんと付けてる」。そういうようなことも、私だけじゃなくて他の先生も授業でちゃんとやってると思いますね。さらに4年生になれば4年生の上半期かな。大体、論文指導の授業もまとめてやるんですよ。それが徹底的にやります。あんまりきちんとやってない論文、要するに引用、それが逃したら、それは一番駄目ですね。そういうふうに学生さんに言っております。

上記の回答16においては、必要な引用の概念自体は、上級レベルの日本語の授業において、論文作成以前に指導を行い、その重要性を学生に意識させつつ、そこから卒業論文での引用の指導に繋げていくとの指摘である。引用の指導は徹底的に行われており、それで問題があれば、「一番だめだ」と強調されている。

4-3-7　書き手のオリジナリティー表出の困難さ

次の回答17では、卒業論文に至る以前に行われる「作文」という授業があり、日本人教員が担当していると述べられている。そこでの書き手自身によるオリジナリティー表出の困難さについて言及されている。

回答17：

作文という授業があるんですよ。作文の担当は、これまで多分、十数名だと思うんですけど、日本人教師が担当してると思うんですよ。（中略）最終目的は、何ていうかな、自分の考えが論理的に述べるような文章が書ければいいなあと、私は思ってるんですけど。自分の考えを、何ていうかな。人と違う考えを持ってる学生もいれば、あんまり何か考えを話したら、何か笑われるとか叱られるとか、そういうふうに思う学生もいると思います。勇気があれば、自分の考えをはっきり出しますけど。

上記の回答17では、自身の主張の伝達について、学生が周囲の評価を懸念し、「人と違う考え」の表出には困難を感じるケースがあるとの回答がなされている。このような、他者の考えとは異なるオリジナリティー、独創性を表出する困難さについても、卒業論文執筆に向けて、懸念される場合のあることがわかる。先の4-2において、卒業論文に対しては、協力者が論理性や独創性を重視した見解を持つことの重要性を示した通り、明確なオリジナリティーの表出を重視していることの裏付けともなる。

4-3-8　論文執筆の過程の重視

次の回答18の協力者は、まず、過去の複数の優秀な卒業論文をも収めた独自の教科書を開発して卒業論文指導に向けた授業で活用している。回答18では、その教科書の内容と主旨について説明されている。それは4年次の前半に授業で活用しているとのことである。

回答18：

ゼミの形を取ってるんですけれども、やはり20人ぐらいのクラスの学生に向けて授業を行っています。（中略）この教科書の一番大きな特徴は、論文の書き方を教えながら、その学生たちにも、論文の書く過程ですね。幾つかの段階に分けて、同時に進めてもらうということです。

上編では論文の書き方。例えば第1章では、そのテーマの選び方。それから、第2章では先行研究の調査の方法。第3章では、研究する対象の資料。第4章では初稿。第5章では修正。改訂ですね。それから第6章では、この論文の最終的に決まることです。定稿。（中略）取り上げた例も、全部、以前の卒業生たちの論文から収集した例です。そして、これらの例は、さっき紹介した下編の、4本の優秀な論文があるんですね。それで、これらの論文の作成の過程では、どのように、最初は、テーマはどのようなものだったのか。その指導の下で、それで学生たちの努力で、またどのように修正されていくのか。これらの例ですね。集めて、この上編の内容を説明するとき、例文として使ってるんです。（中略）ですから、私が授業を進めていくとき、私の指導を受けながら、同時にそれぞれ自分の指導教官の指導も受けて、論文の作成を進めていくのです。

回答18のように、実際の学生の先輩が作成した卒業論文を例として、執筆の過程を重視し、段階を追って学生に理解させながら、執筆を促す流れを作っている。一度文章を作成して終了ではなく、定稿までの改訂作業も重視されており、特に卒業論文のような長い文章を初めて作成する学生にとっては、貴重な学びの機会になると考えられる。ちなみに、当該の教科書には、領域を重視して、「言語学、翻訳・通訳、文学、社会と文化」の４つのテーマの論文が収められているという。

4-3-9　母語の書く能力の育成

次の回答19では、中国語の書く能力についても言及がなされている。

回答19：

中国の、一応教育部（日本の文部科学省にあたる）の日本語学科の教育指導要領があります。その中で、基本技能の一つとしては、やはり書く能力、書く能力が要求されます。以前は、日本語を書く能力を要求されていましたが、今は、同時に中国語の書く能力ですね。要求されるようになってきました。だから、以前は、日本語学科の学生は、日本語の論文を書けばそれでいいんですけども、今のこの指導要領では、論文は1,000字。1,000の漢字ですね。（中国語で）「その要旨をまとめなさい」と要求されるようになりました。

上記19では、中国の教育部による教育指導要領を引き合いに出し、学士課程の中で、書く能力の養成が重視されていると述べられている。同時に、中国語による要旨も求められるようになったことに言及している。つまり、４年間の間に、日本語とともに、中国語の書く能力も獲得することが必要とされているわけである。日本語専攻の教育として、外国語である日本語に加えて、母語の書く能力の獲得も重視されるようになった背景も、当該専攻のライティング指導にとって重要な変化であると言える。

4-3-10　課外の「研究プロジェクト」

次の回答20と回答21では、卒業論文執筆に至るまでの間、大学で推奨されている「研究プロジェクト」について言及がある。このプロジェクトは、いわゆる課外に単位無しで行われるものであり、学生も教員も自由参加である。回答21の協力者によると、7、8割の学生が参加を希望するとのことであり、大学から、必要な書籍の予算を獲得できるという。この研究プロジェクトに参画することが、４年次の研究活動と卒業論文執筆に有益であるとのことである。なお、このプロジェクトにおける論文執筆は中国語で行ってもよいものである。

回答20：

そのときに教師たちが自分の得意な分野、あるいは興味のある分野のテーマ、課題、いくつかつくり出して、学生が自分の興味によって選ぶんです。選ぶんです。そして、大学に申請して、この教師とこのテーマでちょっと研究的なもの、研究のようなものやりたい、そういう形でやってて。そういうプロセスの中で、ある程度ですね、資料収集の能力とか、データ収集の能力とか分析能力とか、いわゆる科学研究の能力、ある程度身に付くと思うんです。これが、卒業論文にとって非常にいいことと私は思います。

回答21：

うちの大学は２年生のとき大学の、日本語何というんですか、研究プロジェクトを立ち上げるんです。研究プロジェクトはほとんど２年生、日本語をある程度話せる段階になってから始まるんですけど、そのときはだいたい１人の先生が１つのチームを作って、そのチームの中には学生さん２人か３人でチームを作って、１つのテーマを巡って論文を書くことにしています。それは１年半続きます。２年生の後半から３年生の終わりまで続きますけども、それは論文の書き方とか文献の調べ方、そして先行研究のまとめ方、問題点の指摘方とか、そういうのが全部、その段階をやってます。（中略）それはやっぱり授業というよりは個別指導の形になっていて、かなり結構何年かやってきたんですけれども、だいたい卒業論文を書く時期になると、論文の引用の仕方、参考文献のリストを見れば、だいたいみんなそういう知識を身に付けているような印象を受けます。（中略）特に３年生の後半の場合はほとんど学生たちが、学部生が院生のゼミに入ってきて、院生と一緒に行動しているうちには、だいたい基本的な知識とか身に付けるようになります。すごく刺激になると思いますし、お互いに学習の仕方とか、特に文献の仕方とか、参考文献の書き方、そういうのが学生同士ある

程度交流できたら、それなりにうまくできるようにと思います。

このようなプロジェクトと類似した機会として、回答21では、3年次の後半から多くの学生が入る大学院生のゼミが行われているとの説明もある。そのような過程において、学部生が論文スキーマを形成していくと考えられる。つまり、論文とは何かといった概念の形成や、そこで必要な参考文献の書き方といった手続き的な知識についても、上記の過程において徐々に培われていくことが期待されていると考えられる。

4-3-11　論文執筆の本質と指導の着眼点

協力者からは、前節までに提示した回答以外にも、自身の研究者あるいは教育者としての興味深いコメントが出された。以下提示する。なお、回答14においても、同様のコメントが出されている。次の回答22は、そのコメントにも通じると考えられる。

回答22：

文章の立て方、思考の考え方、読み手を引きつける、そういう、つまり、書くことの深いところにある、そういう技能っていうかスキル、それは身に付けることはできると思います。ですので、第二言語のライティングの場合、もちろん表現力も必要なんですけれども、表現力は全部というわけではないと思います。それより大切な、書くこと自身の、書くものがもっと大切だと思います。

以上のように、いずれの回答においても、ライティング活動の指導を、単に4技能の一つと捉えるのではなく、より複合的な活動の中に位置付ける傾向が見て取れる。上記の回答22のように、いわゆる言語形式による表現力だけではなく、深い思考と関連付けたコメントは、論文スキーマの形成とも密接に関与するものであり、重要な指摘であると言える。

5　結論と今後の課題

本稿では、中国の大学の日本語専攻を担当する、専門分野がさまざまな中国人教員9名に対して、半構造化インタビュー形式での調査を行った。その結果、卒業論文指導に関わる優れた論文・レポートに関する文章観、および、大学教育の一環としてのライティング教育で目指される指導のあり方について回答を得た。

いずれの協力者も、卒業論文等、求められる論文については、論理性、テーマ設定、問題意識、独創性・オリジナリティー、すなわち研究の内容や書き手自身の主体性を重視する声が多かった。また、テーマ設定や引用、主張を明確に述べること等の指導の難しさも表明され、それらが必ずしも期待される程度にまで学生がそれらを身に付けない場合があることも示された。

学部の低学年からの「作文」から「卒業論文」に至るまでの道筋では、教育上の円滑な連携が必ずしも容易ではないことが示されたが、他方、大学院生のゼミや研究プロジェクトへの参画といった、学生の研究活動に関わる環境を充実させることにより、卒業論文の質向上に貢献が期待されるという取り組みも紹介された。2年次からの中国語で参加可能な研究プロジェクトによって論文スキーマの形成が促されるといった環境は、使用言語が異なっても、卒業論文に挑戦する学生にとって貴重な経験であろう。

今後、さらに情報を収集し、教員の文章教育観と、学部から大学院・社会へと接続する有効なライティング教育を、日本と中国との教育連携も視野に入れて、より包括的に捉える研究を進めたいと考える。

謝辞

ご多忙の中、快くインタビューに応じてくださり、多くの貴重なお話をご提供くださった9名の先生方に心より御礼申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」（課題番号19H01269, 研究代表者：村岡貴子）の助成を受けて行った。

注

1）それらの連続性の問題について、大島他（2016）は、基礎作文・応用作文・卒業論文といった、有用な「漸進的指導」（p.34）を提案している。

2）本稿での重点大学は、以下の中華人民共和国中央人民政府の公式サイトによるもので、この文書では中国の「一流大学」に関する情報が掲載されている。http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe_843/201709/t20170921_314942.html 「教育部、財政部、国家発展

改革委公布世界一流大学 和一流学科建设高校及建设学科名单」（2022.12.22 最終閲覧）また、JST の以下にも情報がある。中国国家重点大学一覧（211 プロジェクト指定校）https://spc.jst.go.jp/univorg/university/univ_000.html （2023.1.14 最終閲覧）

参考文献

阿部新・中島祥子・村岡貴子（2022）「中国の大学の日本語専攻の学生と教員が抱くライティング学習と教育に関するビリーフ ──学生と教員の違いを中心に──」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第26号，pp.73-84.

大島弥生・陳俊森・山路奈保子・因京子（2016）「中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆──学習者・指導者の認識に着目して──」『AJ ジャーナル』第8号，pp. 28-36.

葛茜（2015）「中国の大学日本語専攻教育における教育理念の意味づけと問題点 ──言語教育政策の分析を中心に──」『東京外国語大学日本研究教育年報』第19号，pp. 1-18.

国際交流基金「中国 2020年度」『日本語教育 国・地域別情報』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/china.html（2022.12.20 最終閲覧）

近藤行人（2017）「日本人教師とウズベク人教師の作文に対する文章観の比較 」『社会言語科学』第19巻第2号，pp.10-26.

近藤行人（2018）「ウズベク人日本語学習者の文章観の変容 ──異文化間レトリックに基づく作文教育実践──」『異文化間教育』第48巻，pp.131-145.

中島祥子・村岡貴子（2021）「ライティング教育に関するビリーフ調査に向けての基礎的調査：韓国の大学の事例をもとに」「ライティング教育に関するビリーフ調査に向けての基礎的調査：韓国の大学の事例をもとに」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第25号，pp. 63-73.

村岡貴子・中島祥子（2021）「日本語非母語話者教員による日本語読解・ライティング教育に関する期待と課題 ──漢字圏と非漢字圏の各地域における大学教員への調査から──」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第25号，pp. 85-94.

楊秀蛾（2016）「日本語専攻生の卒業論文作成に対する意味付けおよびその変容プロセス ──中国の大学日本語専攻における実践事例に対する分析から──」『早稲田日本語教育学』第21号，pp. 37-56.

楊秀蛾（2018）『日本語表現力と批判的思考力を育むアカデミック・ライティング教育　中国の大学の日本語専攻における対話を生かした卒業論文支援を例に』ココ出版

楊秀蛾（2019）「中国における大学日本語専攻課程教育の政策的動向」『日本学刊』第22号，pp. 16-31.